

# 「熊本って、緑が懐かしくて、何だかホッとできるんですよ。」

北方謙三さん

ハードボイルド小説の第一人者であり、現在菊池武光をテーマにした歴史小説『武王の門』を連載中の北方さんは、唐津出身の九州男児。今回、講演のため来熊された北方さんに、インタビューしました。

## 「武王の門」

―菊池市は初めてですか。

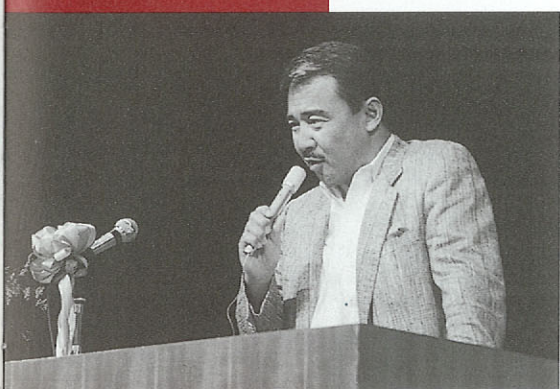
ええ。熊本は三回目なんですけど、菊池は初めてです。今、歴史小説を連載しています。菊池はその舞台なんです。北朝が日本全土を覆っていた時代に、いわゆる南朝がことと太宰府を中心に、信じられないほど栄えた。そういう歴史に僕は非常に関心があるんです。まず小説を書く時は、史実を頭に入

れます。昔の食べものはどうだったか。昔の道は、田んぼは、家は……。そういうことを頭に入れて、昔はどこに何があつたかを考えるんです。それでいくと、ここは何にもない湿地帯だったはずなんですけど、今は家がいっぱい。不思議に思ってます。菊池の方に聞くと、やはり昔、田んぼは平地に作らず、いつも棚田だったという。史実と現実とはやっぱり違うんですね。でも、それが時代なんだなって思いました。

―北方さんは、どうしてもハードボイルドというイメージが強いんですが、北方さんの中にハードボイルドと歴史小説という、構図があるというも面白いんですね。

自分のルールを貫こうという男の姿があれば、歴史の中でも十分に生きてくると思うんです。菊池武光という武

将が、あれだけ北朝が優勢な時にずっと南朝を貫いた。これは恐らく日本の歴史上で見ても、楠木と菊池だけなんです。その貫いた根本に何があつたのか……。そこに、何か現代人の守らなければいけない信条みたいなものを託して書くことができれば、新しい歴史小説が書けるんじゃないかな。そんなふうに考えているんですよ。



## ハードボイルドと歴史小説

―菊池武光にしても、旗色が悪いと分かっているにも関わらず、南朝のために働く。そこにも、やはり男の生きざまみたいなものがあるんじゃないですか。

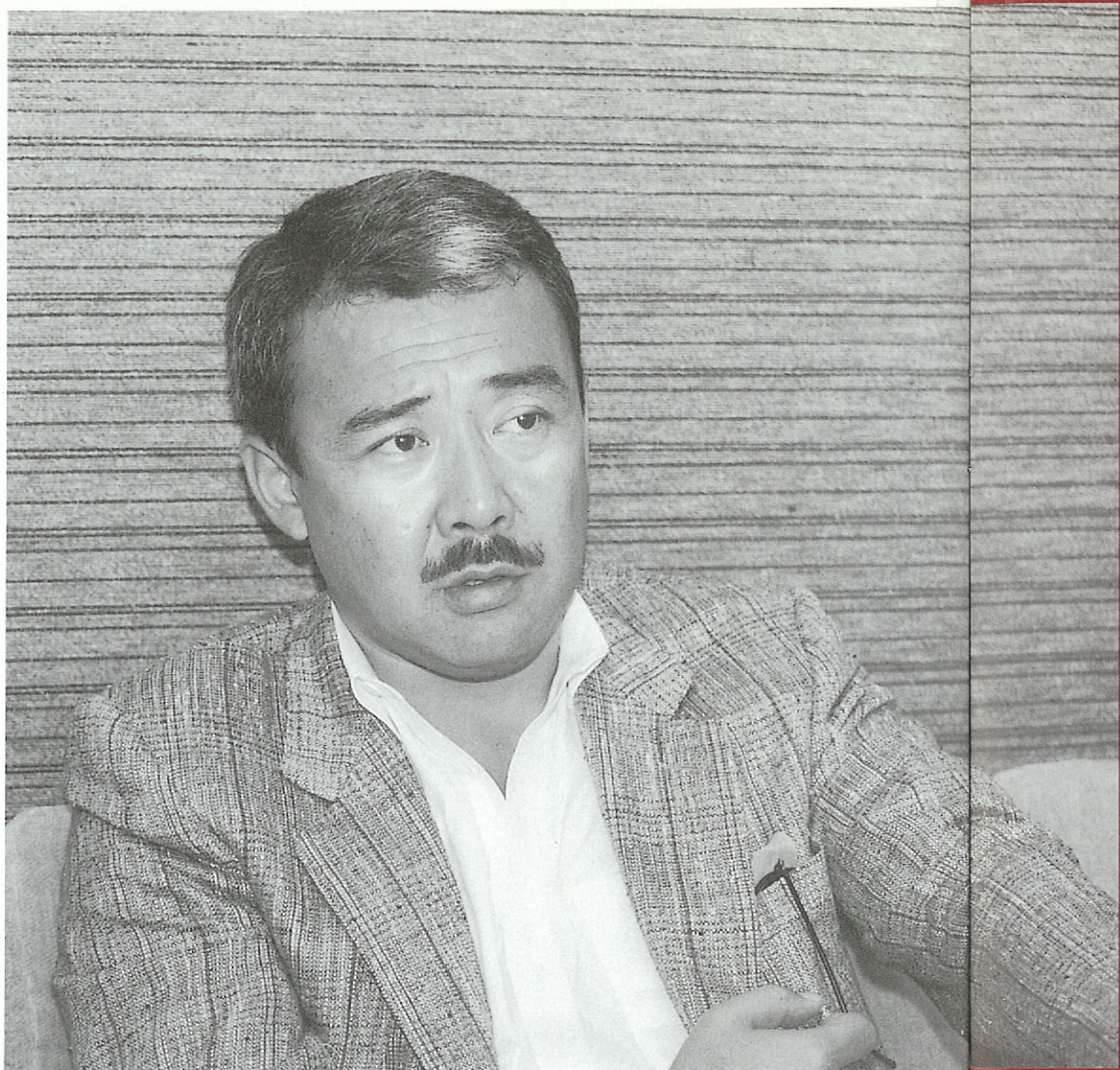
実はね、これを歴史的に分析すると、菊池が南朝にいた理由は北朝に敵がいっぱいいたからなんです。ただ、彼らは非常に戦略的にも勝れていた。そして、懐良と何か同じ夢を見たというところがあるんじゃないかな。そういうところこそ、現代人が歴史の中に感じる夢だと思うんです。

ただ、僕の場合は、肉体的・精神的に弱くても最後の最後で、自分が男であるということにこだわる生き方をしてみたい。そんな願望があつて、それがそのまま小説にも通じてるんだと思うんです。実は小学校五年生の頃東京にいたんですが、先生に熊本の方がおられて、「お前は九州の男なんだから」

って言われたんです。ジーンときましてね。それまでダメだった小学生が、六年生になると立ち直ったんです。その先生がよく「肥後モッコス」と言っていました。これは、はっきり言えばヤセ我慢するようになって。男はヤセ我慢しなきゃいけない時もあるんだって。だから、僕は男の哲学っていうのはヤセ我慢の哲学に最終的には行き着くんじやないかと思ってるんです。ハードボイルドだって、結局はヤセ我慢の文学なんです。

―その恩師の故郷、熊本っていかがですか。

緑の懐かしさのところですよ。それから何か土地が柔らかい感じがします。そんなに懐かしがるくらい熊本を知ってるわけじゃないんですけど、本州や四国とは違うんですよ。いつも懐かしい感じで、自分の心の中に緑がスッーと入ってくるんです。不思議です。



―なぜ、菊池武光だったんですか。

いや、武光というよりも、むしろ後醍醐天皇の皇子で懐良という親王が主人公なんです。八才の子供が「九州に行け」と言われて、六年かけてやっと鹿児島にたどり着く。彼は、ここから北上するんだという渴望を持っていたと思うんです。それで自分の青春をほとんど戦に費やした。そして、それから数年いろいろ苦労してやっと菊池に迎え入れられる。同じ目を持った男、菊池武

光にね。戦をしながら九州を十年間くらい席捲するという時代、いわゆる征西府の時代が来るんです。まさに、奇跡的なことですよ。それがなぜできたんだらうか。調べていくうちに、菊池の経済力の背景に倭寇の水軍力があることが分かってきました。そして玄海灘、松浦港なんかに行き着いたりする。もしかすると、自分の先祖かなと思ったりして……。僕は唐津のほうの方の漁師の家の生まれなんです。

